

実習報告（異校種実習）

外国語教育における円滑な「小中の接続」に関する一考察

—「異質な集団で交流する力」を育てる授業づくりを視点として—

松下 大介（授業実践探究コース：現職教員）

1. 探究実習のテーマと設定の理由

来年度(2020年度)に、小学校外国語教育の本格実施を迎える。ベネッセの調査(2018)によると、英語を好きな児童(生徒)の割合が、小学校第6学年から中学校第1学年になると低下するという報告がある。このデータから、小学校外国語教育に興味をもった児童が、中学校においてもどう興味を継続していけるかが課題の一つと考える。そこで、小学校の外国語教育で培った「英語に興味を持った状態」のまま中学校でも興味を持ち続けることを「円滑な」小中の接続と捉える。

また、今回改訂された新学習指導要領において、「何ができるようになるのか」という資質・能力とその3つの柱が示された。外国語教育においては、現代のグローバル社会を生きるために必要なコミュニケーションを図る資質・能力の育成に加え、「異質な集団で交流する力」の育成も重要であると考え。それは、ライチェンら(2006)が提唱した「キー・コンピテンシー」の中の、「協働し、他者とよりよい関係をつくったり、異文化圏の考え方をを用いて問題を解決しようとしたりする力」である。そこで、「異質な集団で交流する力」の育成に着目した授業づくりについて研究を行った。

2. 探究実習の研究目標

- (1)中学校英語がどのような系統性に基いて行われており、どのように小学校外国語教育との接続がなされているかを学び、中学生の実態をもとに「小中の接続」(小学校の外国語教育とのつながりを中心に据えた)を視点にした授業づくりを考え、実践し、考察する。
- (2)キー・コンピテンシーの「異質な集団で交流する力」を育成する授業づくりについて検討する。そして、授業の分析を通して自己肯定感を高めたり他者への理解を深めさせたりするような効果的な学習活動について検証し、「異質な集団で交流する力」を育成するための授業のあり方について探る。

3. 探究実習の概要

A 中学校において、以下の2つの視点から研究目標に迫りたいと考えた。

- (1)「小中の接続」(小学校の外国語教育とのつながりを中心に据えた)を視点にした授業づくりと、その実践(試行授業I)と考察

A 中学校第1学年のAクラスを対象に1単位時間の授業を行った。本授業では、これまで継続して取り組まれている帯活動と単元の中で指導されていた「話すこと」と「書くこと」を即興的に行うためのツールとしてのマップを作り、表現活動につなげる学習活動を行った。本授業を計画するにあたり小学校からの接続を意識して次の2つの視点を重視した。1つは、中心活動につなげたり、小学校で慣れ親しんできた表現の活用や新出語彙・表現の量を増やして既習事項を定着させたりするための帯活動の工夫をすること。2つ目は、小学校での教材作成の経験を生かして、英語への抵抗を少なくするために、ワークシートの工夫をすることである。

帯活動では、「挨拶や身近なテーマに沿ったやり取り」と語彙や表現の数の増加と定着を目的として、ペアでの挨拶と「30秒クイズ活動」を行った。ペアでの挨拶では単に挨拶だけではなく、小学

校でも聞いたり言ったりし慣れている気分まで生徒同士でやり取りする活動を行い、「30秒クイズ」では、ある物を提示して、色や形など小学校で慣れ親しんできた表現や既習表現を用いて即興でヒントを出して相手に答えを理解させる活動を行った。

ワークシートでは、生徒のイメージが広がるように中心部分に挿絵を提示した。また、挿絵からのイメージや読み取った情報を語句に変えてマップを広げる際に、英語の語順を意識して各要素の配置を工夫した。生徒は、書き出した多くの情報をつないで、即興的に相手に話したり、それを英作文に表したりする活動を行った。

その結果、帯活動の工夫により、英語の学習の雰囲気作りができたと考える。また、学習した語彙や表現を使って、分からない語彙や表現を知ろうとしたり、どうにかして伝えたりしようという生徒の様子が見られた。ワークシートを使った活動では、マップに記入する語彙が増えた生徒がほとんどであった。

(2)「異質な集団で交流する力」を育てる授業づくりと、その実践（試行授業Ⅱ）と考察

A 中学校第2学年 B クラスを対象とし、事前調査の結果から抽出生徒を追跡した。本実習では、「異質な集団で交流する力」を学習形態と学習内容の工夫を通して培うという視点で実践を行った。

本教材では、物語単元である Let's Read1 "The Carpenter's Gift" (*New HORIZON Course2*)を通して「異質な集団で交流する力」を育むという視点から4時間の授業を構成した。具体的には、第3時目に二人の登場人物はどう争いを解決すればよいのか、また、第三者(対人物)の立場からどう解決するかという課題を設定し、それらについてグループで話し合い、自分の意見を表現する活動を行った。

その結果、他者との関わりに不安を感じていた生徒が、グループで意見を交流する活動を通して、「争いを処理し、解決する能力」についての意識が上向きに変容したことが分かった。また、生徒の振り返りの記述等から、ペアやグループ活動の導入が課題への取組みを容易にしたこと、他者と多く関わり情報共有できたことが自分の意見を表現しやすくなったことが推測できた。

4. 探究実習の成果と課題

(1) 成果

(ア) 試行授業Ⅰでは、生徒に小学校の外国語学習で学んだことなどの既習事項を定着させながら、英語への抵抗感をいかに少なくするかという視点もって活動を設定した。それにより生徒も小学校の外国語学習とのつながりを意識して活動に取り組むことができた。このことから教師が小学校と中学校のつながりを意識することで、「円滑な」小中の接続を実現できる見通しをもつことができた。

(イ) 試行授業Ⅱにおいて、「異質な集団で交流する力」に関する活動を設定し、グループ活動を行ったことで、生徒が積極的に活動に参加したりお互いに情報を共有し合ったりする姿が見られた。

(2) 課題

新学習指導要領に明記の「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とする」という授業をイメージして取り組んだが、英語のコミュニケーションについては課題が大きく残った。次年度は、この課題を踏まえて「小中の接続」の視点を意識し、「異質な集団で交流する力」を育成する小学校における外国語学習の授業づくり行っていきたい。

【引用・参考文献】

- ・ドミニク・S・ライチェン／ローラ・H・サルガニク(編著)(立田慶裕：監訳)(2006)『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして』明石書店。
- ・ベネッセ教育総合研究所(2018)「中3生の英語学習に関する調査〈2015-2018 継続調査〉」(<https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=5368>) (2019年7月9日閲覧)。
- ・文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』開隆堂。